



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

人は生きねばならぬ

新型コロナが一向に収束する気配がありません。心配なのは自殺をする人が増えていることです。日本はもともとG7(※)の中でも自殺率が突出して高いのです。今から20年程前は年間の自殺者は3万人を超えていました。今なお毎年2万人近い人が自ら命を絶っています。コロナが流行りだしてからまた俄に自殺者が増えているのです。秋田県にNPO法人「蜘蛛の糸」という団体があります。佐藤久男さんという方が、自殺の瀬戸際に立っている人達をどうにかして、こちら側に引き戻したい、という思いでこのNPO法人を運営しておられます。佐藤さんはこれまで7000人以上を自殺から救ってこられたといえます。佐藤さん自身もバブル崩壊後、経



営^{えい}する会社^{かいしゃ}が倒産^{とうさん}し、自己^{じこ}破産^{はさん}しました。その前^{まえ}から倒産^{とうさん}の恐怖^{きょうふ}で鬱病^{うつびょう}を発症^{はつしやう}し、精神科^{せいしんか}に通^{かよ}うようになっていました。倒産^{とうさん}してから鬱病^{うつびょう}の症状^{しやうじやう}が次第^{しだい}に重^{おも}くなつていききました。夜^{よる}も眠^{ねむ}れなくなり、やっと眠^{ねむ}れたと思^{おも}うと怖い夢^{ゆめ}を見たそ^そうです。街路樹^{がいろじゆ}で首^{くび}を吊^つる夢^{ゆめ}とか、地獄^{じごく}の底^{そこ}に落^おちていく夢^{ゆめ}です。そのうち^{うち}に、死^しんだら楽^{らく}になるぞ^ぞという幻聴^{げんちやう}が聞^きこえるようになって、気^きが狂^{くる}いそうだったとい^いいます。それでも佐藤^{さとう}さんはある本^{ほん}に救^{すく}われたとい^いいます。それは伊藤肇^{いとうはつめ}さんの『左遷^{させん}の哲学^{てつがく}』とい^いう本^{ほん}です。

この本^{ほん}は今^{いま}も佐藤^{さとう}さんの人生^{じんせい}のバイブルだそ^そうです。その中^{なか}の二^{ふた}つの言葉^{ことば}に励^{はげ}まされたとい^いいます。一つはシェイクスピア^{シェイクスピア}の言葉^{ことば}で、「嵐^{あらし}の中^{なか}でも時間^{じかん}は経^たつ」とい^いうものです。死^しんでしまいたいと思^{おも}う程^{ほど}の苦^{くる}しみの真^まっ只中^{ただなか}にいたとしても、どんな嵐^{あらし}も、苦難^{くなん}も、必^{かなら}ずそれ



は過ぎ去っていくものだ」という意味です。もう一つは勝海舟の「人の一生には焰の時と、灰の時がある」という言葉です。人生には何をやってもうまくいく勢いのある焰の時と、何をやってもだめな灰の時がある。だめな時には自己に沈潜して自己に向き合い、時が巡ってくるのを待つことが大事だ」というのです。

この二つの言葉に励まされて、悩んでも、落ち込んでもしょうがない。生きていることが幸せだと自分に言い聞かせ、ゆったりと日々を過ごしていたら、鬱病が治ったといえます。

実は同じ頃に知り合いの経営者が3人自殺していました。佐藤さんは、どうにかしないといけない」と秋田県知事の所に相談に行ったそうです。すると県知事からは「役所ではどうにもならないから、佐藤さん、あなたがやってください」と言われ、一人で始めることになりました。



した。

最初は一人で、経営に行き詰った経営者の相談に乗るところからスタートしたのです。いろいろな人が相談にきました。佐藤さんは話を聞きながら、必ずしたことがあります。それは次の約束を取ることです。話を聞いていると相手はほとんどが「もう死にたい。もうだめだ」と言います。佐藤さんはそういう人に、来週また会いましょう」というメモを渡しました。そして、次に会った時も、また来週、また来週」と約束をしていくと気がつけば、その人は一カ月自殺を思い止まって、生きているのです。そうするうちに、悩みの一番のもとがだんだんほぐれてきて、自殺する理由がなくなってくるそうです。時間が解決してくれるのです。その辺りで専門家を紹介されるそうです。専門家というのは、鬱病ならお医者さん、債務で困っているなら弁護士さん、生活保護を



う
受けたのなら行政ぎょうせいの人ひとです。多くの人達おほひとたちが「佐藤さとうさんに
で
出逢であえて本ほん当とうによかった。佐藤さとうさんに出逢であわなかったら
死しんでいました。本ほん当とうに命いのちの恩人おんじんです」と言いっているそ
うです。

わたし
私の中学校ちゅうがっこうの同級生どうきゅうせいの女おんなの子こが、高校こうこうに入い学がくしてすぐ
に自殺じさつしました。電車でんしゃのホームから、来きた電車でんしゃに飛とび込こ
んでしまったのです。失恋しつれんが原因げんいんだったそうです。おそ
らく男おとこの子こにふられて、そのまま誰だれにも相談そうだんせずに電車でんしゃ
に飛とび込こんでしまったのだと思います。その間あいだに誰だれか友とも
達たちにでも「ふられちゃった。死しんでしまいたい」と話はなし
ていたら、「絶対ぜったい死しんじやだめだよ。あんな男おとこたいした
ことないよ。男おとこなんか星ほしの数程かずほどいるよ」とでも言いってく
れたかもしれません。そうすれば状況じょうきようは変かわっていたと
思おもいます。



上智大学の渡部昇一先生が講演で仰っていました。

「ゼミの学生が、もうこの世の終わりのような顔をしてやってくることがあります。そういう時に、『どうしたんだ?』と聞くと『女の子にふられました』と言います。そこで私はその学生に対して『ああ、良かったな』と言います。うんです。するとその学生は『先生、何が良かったんですか』と言い返してきます。そこで私は『これはもっと良い人に出逢えるという吉兆だぞ。前祝いに一杯飲みに行くか』と誘うんです。そして半年か一年すると『先生の言われた通りでした。もっと良い人に出逢えました』と報告に来るんです」

渡部先生や佐藤さんに出逢えた人は本当に幸せだったと思います。

人との出逢いは運命を変えることがあります。佐藤さんは雑誌のインタビューで「時には相談がうまくいかな



いケースもあったのではないですか？」と聞かれました。
すると佐藤さんは「一度もないです。来週また会いま
しょう」と約束して、相談者が来なかったことは一度も
ありません。皆さん、実は死にたくないんです。本心で
は生きたいんです。ただ、悩みが凝り固まってしまって、
それに押しつぶされそうになっているから『死にたい』
なんて言われるんです。実は内心は誰でも生きたいんで
す。その凝り固まった悩みをほぐして、ひも解いていけ
ば必ず自殺は防ぐことができるのです」と答えておられ
ます。

また、「自殺をしようという人はだいたい真面目です。
こうでなければいけない」という形を求めている方が
多いのです。それがよくないのです。いい加減がいいん
です。他人に対しても自分に対してもほどほど、いい加
減がいいんです。そうするとみんな楽になれます」とも



言いっておられます。

佐藤さとうさんはもう一つ「『自分じぶんはダメな人間にんげんだから死しに
たい』と相談者そうだんしやは言いってきます。でも相談そうだんに來た人ひとでダ
メな人ひとなんて一人ひとりもいませんでした。話を聞きいていると
皆みなさん、すばらしい所ところを持もっておられます。私わたしにはそれ
が見みえるのです。それをその方かたに『あなた、こんな良よい
ところがあるじゃないですか』と言いうと、本人ほんにんも氣きづい
ていなかった長所ちやうしよにそこで氣きづくのです。そうするとそ
れがとっかかりとなつて、『佐藤さとうさん、もう一度頑張どがんばつ
てみます』となるのです』と言いわれています。

自殺じさつの瀬戸際せとぎわに追おい込まれそうな人ひとにぜひ紹介しょうかいしたい
お話はなしがあります。朱川湊人しゆかわみなとさんの『本日ほんじつ、サービスデー』
という本ほんの中の『蒼あおい岸辺きしべにて』という短編小説たんぺんしやうせつです。
主人公しゆじんこうの20歳さいの女おんなの子こ、早織さおりが人生じんせいに絶望ぜつぼうし、睡眠薬すいみんやく



を大量に飲んで自殺をはかりました。意識を失って、気が
がつくと目の前に大きな川がありました。おそらく三途
の川です。その川の辺に渡し守がいました。渡し守は
「今からお前を向こう岸に連れて行く」と言います。そ
して、早織の顔を見て、「なんだお前、寿命前か。厄介
なのが来たな」と言うのです。この男は続けて「寿命前
の奴はこの世に執着が強くて、なかなか魂が離れない
だ。寿命を全うした人間は魂がスツと離れるから、すぐ
に向こう岸に連れて行けるんだが、寿命前の奴はなかなか
魂が離れないから連れて行くのが厄介なんだ。まあち
よつとここで、魂が離れるまで時間をつぶそう」と言う
のです。男には早織の頭から紐が出ていて、それがしっ
かりと魂にくっついていてるのが見えるようなのです。男
が「時間があるからその間にお前の未来ゴミを捨ててお
こう」と言います。何のことかと思うと、その男が卵の



ようなものがたくさん入った大きな麻袋を出してきて
「これがお前の未来ゴミだ」と言うのです。早織が「それは何ですか？」と聞くと、男は「これはお前がこれから掴むはずだった未来だ。しかし、お前は自分の都合で死んでしまってもう用がないから、今から川に捨てる」と言います。まず捨てたのは「これはすぐ後に出逢う、生涯の親友となるはずだった○○ちゃんだ。もう出逢うことはないから捨てる。次に、これはお前の恋人だな。これも捨てる」。その時に早織は、「私に恋人なんてできるの。こんなデブでブスなのに」と言いました。「いやあ、お前なかなかいけてるぞ。でももう用はないな」と言って捨てました。捨てた後に、「この男は捨ててもいいなあ。お前に二股をかけていたわ。どうしようもない奴だな。でもな、お前は二股をかけられてがっかりするんだけど、その後ダイエットをして、自分を磨いて、



すごくきれいになるんだ。その後、本当の旦那に出逢うんだ。でもこれもいらないな」と言っいてその卵たまごも捨すててしまいました。それから小ちいさな卵たまごが二つポンポンと捨すてられました。早織さおりが「それは何なに？」と聞きくと、「お前まえの子こども達たちだ」と言いわれ、がっかりしてしまいます。その後あとに今度こんどはまた別べつの物ものを捨すてられ、何なにかと尋たずねると「絵本えほんだ」と言いいます。早織さおりが「私わたしは子こどもの頃ころから絵えを描えがくのが好すきで、絵本えほんを出だしたと思おもっていたんですが、才能さいのうがないと思おもってそんなことはあきらめてしまいた」と言いうと、男おとこは「お前は才能さいのうを超こえるようどりくな努力つとを続つづけていっいて、絵本えほんを出だすんだ。お前まえは文学賞ぶんがくしょうも取とるぞ。そして、どんじんどん世界せかいを広ひろげていっいて、たなくさん仲間なかまができて幸しあせな人生じんせいを歩あゆむ、そそういいう卵たまごがたたくさんあるぞ」と言いって、それらそれらを全ぜん部ぶ捨すてていくのです。早織さおりは、そんな未み来らいがああったのかかと、生いきていた時とき以上じょうに落おち込こ込こ



んでしまいます。するとその男は、「もしもう一度、人間に生まれることができたなら、今度はもう少し頑張ってみるんだな。俺から見れば人間の悩みなんてだいたいたしたことはないんだよ。今度、生まれた時はもうひと頑張りしてみるんだな。生きる自由、死ぬ自由、両方ともある。だったら生きる方を選んだ方がいいぞ。そっちの方が絶対楽しいぞ。さあ、船を出すか」と言い、渡し船を漕ぎ出します。その時に早織が

「もう一回、元の世界に戻りたい」と言います。

「いやあ、この船は一度漕ぎ出したらもう戻れないんだ」

「まだ2メートルぐらいしか離れてないじゃないですか、私それぐらい泳げますよ」

「残念だが、お前は泳げないんだ。亡者はこの水に浸かった瞬間、石になって千尋の底に沈んでいくんだ。

可哀想だがお前はもう戻れないんだ」



「戻りたい。お願いします。もう一回頑張ります」と早織が懇願すると、男は「しようがないなー、一回きりのサーブスだ」と言っいて、オールを持もつ手を精一杯伸のばします。「早く走はっはしして行いけっ」と言いわれ、早織はその男の背中、頭、腕、オールの上を一気に駆け抜けていきます。しかし、もともと運動神経が鈍にぶかったのか、最後にオールから足を踏み外はして、三途さんずの川に足がついてしまいました。石になるかと思おもったら靴を履はいていて助たすかったのです。そして、水の上を歩あるくようにトントンといいって元の岸に帰もどることができました。どういいうことかと思おもっていると、男が答こたえを教おしえてくれました。

「その靴はな、お前に生いきかえまええて欲ほしいと願ねがっている両親や姉さんや友達の思おもいだぞ。今も病室の前でひたすら祈いのっているぞ。そういう人達の恩を思おもわないといいけないぞ」



そして最後に男は「さっき見せた未来ゴミは、おまえが現世に戻ればまたちゃんと復活する。でも、しよせんすべて卵だ。育てないと孵らない。お前のこれからの努力次第だ」と言うのです。それを聞いて、早織は「ありがとうございますございました」と言っ元の世界へ全速力で走っていききました。

運命というのは本当にわからないものです。人との出逢い、心の持ちよう、また努力によって変わっていくものです。

長野県松本市にフジゲンというエレキギターを作っている世界的なメーカーがあります。その会社の横内祐一郎会長は現在90歳を越えて豊饒としておられますが、その横内さんが若い頃の話です。1960年代に社長の三



村豊さんから「うちも他の会社と同じように海外に行って物を売らなければいけない。うちのギターもアメリカで売ろう。さしあたって横内君、ニューヨークに行ってギターを売ってきてくれ」と言われました。横内さんは「私が行くんですか。私は英語を話せませんよ」と言う」と「君ならできる。大丈夫だ」と言われ、横内さんはギター4本を持ってニューヨークに行きました。楽器店を調べると125軒ありました。その125軒を一軒一軒回っていききました。セールストークは書いたものを読むのですが、読むと相手は何か言います。横内さんは英語ができないので何を言っているのかさっぱりわかりません。一言だけわかったのが「ゴーホーム（帰れ）」でした。そのように門前払いの日々が続いていました。そのうちにアメリカでは、アポイントメント（面会の約束）を取らないと会ってもらえないことがわかりました。ア



パートから電話するのですが、横内さんは聞き取りがで
きないので、来ていいと言っているのか、断られている
のかわかりません。一応、「電話をした横内です」と言
って行くのですが、売れるわけがありません。それでも
何カ月も電話をしては店に通いました。

その内に軍資金も底をついてきて一日一食、ホットド
ック一個とコーラ一本という生活が続きました。それで
も毎日毎日、楽器店を回りました。全く売れず、ほとん
ど門前払い同然でした。

ある日、セントラルパークのベンチに座って夕日を眺
めながら、ニューヨークまで来て自分は何をしてるんだ。
家族も心配しているだろうな。と思うと涙が止まらなく
なったそうです。すると通りがかったアメリカ人の老紳
士が「どうして泣いているんだ？」と声をかけてくれま
した。あまりにも優しい眼差しで聞いてくれたので、横



内さんは思わずその男性にすがりついて大声で泣いていました。泣き疲れた後、「自分は実は仕事でアメリカに来たけれど、全くうまくいかない。会話ができないのが一番の原因だ」と話すと、その男性が「ああ、役に立てるかもしれない。うちへ来なさい」と言います。その人は海軍病院のドクターでした。家に着くと早速奥さんがおいしい食事を作ってくれました。アメリカに来て以来、最高の夜でした。

翌朝から二週間その家に泊めてもらい、奥さんに毎日英語を教えてもらいました。横内さんによると、奥さんは本当に教え方が上手で、英語とはこういうものかとわかったといえます。十日経った頃、奥さんが、「ベトナム戦争のことをどう思うか」と聞いてきました。それに対して横内さんが夢中で自分の意見を10分以上も英語で話したのです。奥さんは「ブラボー、すごい進歩よ」



と言って、泣きながら抱きしめてくれたそうです。

運命の転換点というものがあるものです。今まで全く
取れなかったアポイントメントが簡単に取れて堂々と楽
器店に行くことができました。すると、最初の店で「あ
なたのところのギターはすばらしい。よし、契約をしよ
う」といきなり300本の契約をしてくれました。うれ
しくてうれしくて、泣けて泣けて受注書を書きながら手
が震えたそうです。

その後、大陸横断バスでニューヨークだけでなく、ア
メリカ中を二カ月間回り、1万本の契約を取ったそうで
す。当時のお金で20万ドルです。ジャズの聖地、ニュー
オーリンズではギターの神さま、ジョージ・ベンソンと
出会いました。後にジョージ・ベンソンはフジゲンのギ
ターを愛用するようになり、フジゲンは世界ブランドと
なっていたのです。今ではフジゲンは多くの有名アー



ティストが使用^しするブランドとして知^しれわたっています。
余談^{よだん}ですが、横内^{よこうち}さんが社長^{しゃちょう}の三村^{みむら}さんとギターを作^{つく}
り始^はめた頃^{ころ}の工場^{こうじょう}は牛小屋^{うしごや}だったそうです。
人生^{じんせい}はあきらめなければ道^{みち}は開^{ひら}けるのです。

最後^{さいご}に仏教詩人^{ぶつぎょうしじん}・坂村真民^{さかむらしんみん}さんの詩^しを紹介^{しょうかい}したいと思^{おも}
います。

鳥^{とり}は飛^とばねばならぬ
人^{ひと}は生^いきねばならぬ
怒濤^{どとう}の海^{うみ}を飛^とびゆく鳥^{とり}のように
混沌^{こんとん}の世^よを生^いきねばならぬ
鳥^{とり}は本能的^{ほんのうてき}に暗黒^{あんこく}を突破^{とつぱ}すれば
光明^{こうみょう}の島^{しま}に着^つくことを知^しっている
そのように人^{ひと}も一寸先^{すんさき}は闇^{やみ}ではなく



光であることを知らねばならぬ

新しい年を迎えた日の朝

私に与えられた命題

鳥は飛ばねばならぬ

人は生きねばならぬ

これだと思えます。暗黒を突破すれば光明の島に着く。

この詩は坂村真民さんが66歳の時、正月元旦、夜明け前に宇宙の天心霊からの感応を受けて作られた詩です。この後に「私の死生観が変わった。お釈迦さまが八十年の生涯で身をもって示されたのは、人は生きねばならぬということであった」と言われています。

人は懸命に生きなければいけないのです。そして生きている間、徳を積まなければいけないのです。

(※) G7＝先進主要7カ国の首脳会議

